

# コウテイペンギン生息地訪問者ガイドライン

## 1. はじめに

これらのガイドラインは、野生生物の生息環境に対して懸念される影響を最小限にとどめ、南極条約への環境保護に関する議定書の附属書II (Conservation of Antarctic Fauna and Flora) (南極動植物の保全) に準拠する方法を提案しています。本ガイドラインは国内政府の法律に成り代わるものではありませんが、海洋環境への攪乱減少を目標とした補足の行動規範を規定しています。一部の国にはIAATOのガイドラインを無視する可能性のある、より厳しいガイドラインや規則があります。コウテイペンギンの生息地は南極特別保護エリア (ASP) 内にある可能性があり、生息地の訪問の前に許可が必要な場合があることに注意してください。

このガイドラインの目的は短期的、長期的に日常と季節ごとの通常の行動パターンの維持を確実にすることでコウテイペンギンの妨害を最小限にし、ペンギンの数への有害な影響を防ぐことです。



## 2. 可能性のある影響

コウテイペンギンの生息地に管理された訪問への影響は現時点で分かっていません。避けるべき影響は次のとおりです。

- 飛行機で上陸または飛行活動する訪問者によるペンギンだけでなく野生動物全般への妨害
- 非在来生物の侵入。

## 3. 野生生物への妨害の回避

- 一度に100名以上の訪問者を上陸させない。探検ガイドやリーダーは除き、ガイドごとに最大20名の訪問者。20名以下の訪問者の場合、少なくとも2人のガイドが必要です。

生息地を訪問する際はゆっくりと注意深く歩き、ペンギンから5mの予防の距離を保ちます。野生動物の行動に変化が見られた場合は距離を伸ばします。常に野生動物に権利を与えます。

ペンギンが海に出入りする氷河の端に面した生息地に隣接したエリアでは15mの距離を維持します。

可能な場合、訪問者とペンギンの通路を分けます。

ペンギンが移動している異なるエリアを横断しなければならない場合、訪問者が広がるよりもしっかりとグループにまとまるほうが最善です。

移動しているペンギンが約15m先にいる場合、ペンギンが行きたい方向を選べるように訪問者は停止するべきです。

呼吸孔において、訪問者を追いかける可能性のあるヒョウアザラシ (Hydrurga leptonyx) に注意します。ウェッデルアザラシを囲まず、大人と子供のアザラシの間やアザラシと呼吸孔の間に入りません。

### 3.1 コウテイペンギンの生息地での訪問者のガイド

#### 3.1.1 コウテイペンギンの生息地への接近

コウテイペンギンの生息地へ接近する際には次の注意が必要です。

- ひなのいるコウテイペンギンの生息地から25～30m以内の場所に停止点を設ける。すべての乗客とスタッフは設けられた停止点に最低5分留まり、ペンギンの行動を見極めます。
- ひなに繰り返しまたは継続して翼をパタパタしたりといったおびえた反応がなければ、グループを生息地に10～15m近づけます。
- 見極めを繰り返し、5～10分ごとに近づきます。
- 継続してペンギンの行動を見極め、妨害のサインがあれば後退します。決して5m (15フィート) 以内に近づかないでください。
- コウテイペンギンの生息地を取り囲まないでください。すべての乗客とスタッフの活動は生息地の片側で行ってください。

### 3.1.2 氷河の端に巣立とうとしているひながいる場合

- 水辺にいる場合、巣立とうとしているひなは最初、あまりおびえていません。
- ひなの一団の片側に訪問者を集め、ひなが水に入る準備をしている場所から 15m 離れた場所に訪問者を座らせることが推奨されています。
- 乗客が座っているとひなは多くの場合、すべての抑制を失います。
- ひなが訪問者の間を移動するため、訪問者はひなに囲まれていることに気がつくかもしれません。じっとして、移動する必要がある場合はゆっくりと移動するように心がけます。
- また、この地点では通常、大人のペンギンも人間の活動にあまり心配しません。



### 3.1.3 閉ざされたエリア

- 潮の亀裂、アザラシの呼吸孔、海氷の弱い場所、ペンギンの穴や潮の割れ目にアクセス通路といった危険を避けるため、ガイドは制限されたエリアを指定する可能性があります。

### 3.1.4 ガイド付きウォーキングエリア

- 生息地へ近づく道には旗が立てられ、ゆっくりと移動するペンギンの群の経路と距離を開けるべきです。生息地にはいくつかのペンギンの群れがあるため、生息地への適切な接近ルートに注意して旗を立てるべきです。ペンギンのマーキングの妨害を抑えるため、生息地の周りの旗を制限しながらも訪問者には正しく指示が伝わるようにします。このルートはガイド付きにするべきです。生息地への訪問中に小さいグループの訪問者が数日キャンプを行う場合、生息地には常にガイドがいるため、ガイドは最初のみ必要かもしれません。

### 3.1.5 自由に歩き回るエリア

- 訪問者はキャンプエリア（キャンプをする場合）とペンギンの生息地の近くで自由に歩き回ることができます。20名の訪問者に対し、1人の比率でガイドが訪問者とともに常に現地にいる必要があります。このエリアには経路とペンギンの群れの移動を妨害しないように明確に旗が立てられなければなりません。

## 4. 飛行機の運航に対する安全と妨害緩和方策。

飛行機（ヘリコプターを含む）は南極条約決議 2（2004 年）の「南極にいる鳥の集団近くでの飛行機の運航のためのガイドライン」で示されたガイドラインに従うべきです。このガイドラインに加え、生息地の近くに着陸する場合、次の緩和と安全方策を考慮する必要があります。

- 海岸線に直角に、飛行アプローチで 2000 フィート（約 610m）AGL 以上で入る。
- 垂直の分離距離を 2000 フィート（約 610m）AGL、可能であれば水平の分離距離を 0.25 乖離（約 460m）に保つ。
- コウテイペンギンの生息地（ペンギンの主な経路を含む）やアザラシの上を飛行しない。着陸エリアの安全を推定するため、生息地へのアプローチ時には潮の割れ目や近くの氷河の端を観察する。生息地またはアザラシから最低 0.75 マイル（約 1km）の場所に着陸する。

- 主な物理的障壁（例：氷河）の後ろ、可能であれば、生息地とアザラシへの妨害を最小限にするために風下を着陸場所を選ぶ。
- 安全な着陸操作と一貫した点検および/または抗力航空路の経路数を最小にする。
- ヘリコプターの運行がある場合、着陸場所に野生動物がないことと安全な着陸操作と一貫していることを確認する。
- エンジンをかける時と離陸するときに航空路に野生動物がないことを確認する。

## 5. 安全の考慮点

- 特にヘリコプターを運行する場合、天候が変更した時に緊急のベースキャンプの設営が可能な緊急設備を用意しておくことが重要です。
- Tベースキャンプエリアは着陸後すぐに氷が安全かの確認が必要です。
- すぐに変わる天気は訪問者のグループが広い範囲に離散している場合、重大な問題の原因になる可能性があります。ガイドは天気と海の氷の状態を監視し、状況により、いつでもキャンプに戻ることができるようにしておかなければなりません。
- 海の氷は割れたり、急激に変わる可能性があるため、常に注意しなければなりません。潮の亀裂の近くでは特に注意が必要です。

## 6. 生物安全対策と廃棄物管理

南極への非在来生物の刺入は大陸の生物の多様性にとって潜在的な脅威であると認識されているため、生物安全対策と廃棄物管理は非常に重要です。コウテイペンギンの生息地を訪問するには次の方策を実行する必要があります。

- 訪問前にブーツや装置を清浄するといった生物安全対策確認を行います (IAATO の生物安全対策についてのガイドラインに従う)。
- 生息地に調理されていない鶏肉製品を持ち込みません。
- 貯蔵所や緊急時用の備えを設け生息地や日光浴をしているアザラシから最小 0.75 海里 (約 1km) の場所でキャンプする。野生動物から廃棄物やゴミを守り、訪問の終わりにすべての廃棄物を持ち帰る。
- 中水点を設け、宿泊する場合は場所を記録する。



コウテイペンギンの生息地の航空写真



天気の良い日のコウテイペンギンの生息地



天気の悪い日のコウテイペンギンの生息地



コウテイペンギンの生息地での氷河近くのキャンプ地



生息地の上を飛ぶオオトウゾクカモメ



呼吸孔にいるヒョウアザラシ